

としても、研究者によつてその定義が異なることは研究分野を問はず確認されている状況であるため、その錯綜をまとめ、共通理解の形成を目指そうとする著者の姿勢は見習われるべきである。

(あおき・たかふみ 京都大学大学院文学研究科博士後期課程)

(A5判、三九〇ページ、一八八〇円、吉川弘文館、二〇一八・四刊)

青木 馨著

『本願寺教団展開の基礎的研究

戦国期から近世へ

誉田 慶信

本書は、本願寺教団の基底をなした在地道場を基本的視点にすることにより、これら道場が近世の寺院へと成長し、教団内身分を獲得していく様相を論述したものである。

本書の内容を、以下かいつまんで紹介する。「序論—研究史と課題」に続き、第I

門徒を擁することで大坂本願寺を中心とするネットワークで結ばれていたこと、鷺塚坊は交易利便の地としての存在意義を有し、土呂坊は権威的な本願寺直属の血族寺院として、三河門徒総守力の上に存在したこと述べる。

第四章「本願寺教団の形成」では、絵像本尊の分布状況に基づき、蓮如本願寺帰参前後から三河国に教練が伸びていたこと、三カ寺が「川・海型」門徒集団として急成長し、蓮如本願寺化とともに実如段階までの短い間に道場本尊の絵像化が急速かつ濃密に進行したこと、矢作川流域の大坊主とする土呂坊・鷺塚坊本宗寺が存在したこと、また本願寺にならった勤番制が布かれていることを述べる。補論「御文」本流布の実態では、寛永期を中心とする時代が、本尊・「御文」整備の近世前半でのピークであること、師弟関係において門主は、茶華道などの家元的性格をおびたことを述べる。

第二編「本願寺門主制と近世の末寺身分」は、戦国期本願寺の身分上昇と権威化、近世における末寺の寺院化と、住職家の確

立を背景とする身分上昇と権威化について論じる。

第一章「本願寺門主制の性格」では、近世になって教法伝持の「家」と権威存続のため、相伝家が大きな意義と責務を有したとする。本願寺門主も血統「家」で相承されていくこと、門下に対する免許発行権が門主により独占されることなど、本願寺こそが近世家元制の先駆的形態を示し、近世を通じて濃厚になると述べる。

第二章「戦国期門主とその一族—装束に見る」では、本願寺門主や一族、地方末寺住持の教団内身分について、装束や紋から明らかにする。蓮如までが無地の僧綱襟の衣に白系五条系袈裟と檜扇であり、実如は鶴丸紋衣に同紋五条袈裟と檜扇、証如・顯如が八藤紋衣に同紋五条袈裟と檜扇所持であったが、証如段階で貴族化、歴代門主の権威化が進み、顯如期には一家衆実譽にも鶴丸紋衣が許されたとする。

第三章「近世「似影」に見る住職家の成立と格付」では、衣や紋などの許認可権を本願寺門主が独占し、家元的存在であったこと、「似影」は地方家元の成立を意味し、近世中葉になると末寺住持には六藤紋を確立させ、本願寺の教權高揚と家元的性格

編「三河における地域道場から教団への展開」は、三河国において本願寺傘下に入つた地域の「本願寺教団」の様相を考察する。第一章「三河の初期真宗概観」では、門流としての高田系・荒木系、その傍流の仏光寺系などに集約できない段階をへて、蓮如本願寺への諸門流の帰参の地方版が展開し、上宮・勝鬘・本証の三カ寺を生み出し、また地方版本願寺としての蓮如の名跡として土呂坊（本宗寺）が建立されたことを述べる。

第二章「文明十六年『如光弟子帳』では、三河佐々木上宮寺如光の弟子帳を用い、寺院化以前の道場段階でも何らかの本末関係が具体化されたこと、本願寺

—手次坊主上宮寺—手次坊主（末道場）—弟子（孫末道場）という、法儀を介した門徒間の重層的手次関係を構築していたこと、また上宮寺の本願寺帰参当初の門侶形成期に、近世の本末制の基盤が構築されていることを述べる。

第三章「本宗寺の成立と展開」では、本宗寺が土呂坊・鷺塚坊の二坊を並置し、播磨英賀坊本徳寺を兼帶する全国的に類例のない寺院であり、伊勢射和・大和吉野にも述べる。

格化のうえ許認可すること、本願寺教団の家元的性格は装束や紋における格付と序列化のなかにも及び、本願寺「家」と末寺「家」との擬制的血縁関係により身分の序列化が明確になることを述べる。

補論「願力寺所蔵史料『余間昇進記録』」では、「余間」昇進（身分上昇）にかかる顛末を記した同史料を翻刻し紹介する。

第三編「本願寺下付物と墨書名号」は、由緒書と付随する法寶物の伝承化を前提とした本願寺下付物や墨書名号について明らかにする。

第一章「戦国期本尊・影像論」では、実如段階でピーカーとなる絵像本尊は、道場草創期の本尊というより道場の一定の安定段階に達した時に下付されたこと、縹縕縁の礼盤に座す親鸞像は、権威化を視覚的に表現したものであり、礼盤の三狭間と二狭間とに分けての授与は直參門末の権威化を招いたこと、これらは門末の身分的序列を明確化させ、本願寺の教權高揚と家元的性格をもたらしたことを述べる。

礼拝を中心とする本尊的機能から信心獲得の用として質的転換を意味するものであつたこと、三河国では、蓮如期において絵像本尊化は漸次進むものの墨書き名号が道場本尊として機能しており、実如期に急速に絵像本尊化が進むのに対して、飛騨国では、蓮如期から比較的絵像本尊化が進むものの、むしろ実如期に名号の本尊機能の比重が大きくなることを述べる。

補論「墨書き幼児名号について」では、幼児神号が親鸞の幼児伝承と一体化し、蓮如に仮託されたものを生み出し、同様に蓮如幼児伝承も「蓮如筆」幼児名号と一体化したこと、「无」の文字を用いた幼児名号群は宣如期の偽作であり、また觀如を歴代並に加えた歴代銘も宣如に仮託されて偽作されたこと、そこには觀如没と宣如繼職にともなう確執があつたことを指摘する。

総論「由緒・伝承の成立」では、由緒・旧跡の成立過程で関連法寶物や文書などが「作成」されていく実体を明らかにする。

以上、本書の全体を貫く論理は、道場の寺院化の道程から、本願寺の門跡成による権威化と組織化、末寺の拡充とともに身分上昇について、その性格と機能を家元制

とすることである。本願寺教団の壮大な身分序列は、可視的な表象を含みながら在地世界の寺院まで覆い尽くしていたのである。ないものねだりの疑問点を一つだけあげる。在地門徒寺院は、従順に本願寺教団内で身分上昇をしようとしただけだったのだろうか。巨大家元教団の成立過程に内在する「矛盾」とは何であったのか、知りたいところである。もっとも戦国期・近世本願寺教団について、文献史料のみならず法宝物などへの細部にわたる厳密な考証から導き出された結論は、説得力に満ちている。

本書は、伝承・由緒が近世本願寺教団システムの形成と連動して創出されていくことを、戦国期から近世までの長い歴史のかで見事に解明しており、真宗教團史研究に新たな地平を切り拓いた研究書と言える。

(ほんだ・よしのぶ 岩手県立大学盛岡短期大學部名誉教授)
(A5判、四六六ページ、一〇五八四円、法藏館、二〇一八・三刊)

行基と歩く 歴史の道

四六判・二二六〇円
法藏館

堺に生まれ育ち、権原考古学研究所に長らく勤務した著者が、主として雑誌『近畿文化』に掲載した論考をもととして、行基に関連する史跡や長尾道・近つ飛鳥・中高野街道などを紹介する。帯に「近畿人も知らない古社寺・遺跡が面白押し!」と記されているとおり、土塔や巨椋池跡などといった著名な史跡から神社・古墳・廃寺まで、わかりやすく解説され、ガイドブックとして最適。贅沢を言えば、徒步距離などの情報があると、より便利であった。(I)

新刊寸描

岩田真美・桐原健真編

文化史面における近世から近代への連続を意識した論考・コラムが収められ、幕末維新期の思想・宗教の実態が鮮やかに描かれている。見逃せないのは、神仏分離といつた幕末維新期に起こった歴史事象が、いかなる言葉でいかに語られてきたのかにも論及している点である。この視点に立つことで、本書は従来の術語や概念に相対化を迫るものとなっているからである。実態と言説の双方から幕末維新期の歴史像に再検討を加えた刺激的な論文集である。(猪)

新刊寸描

龍谷叢書
力ミとホトケの
幕末維新
交錯する宗教世界
A5判・二二六〇円
法藏館